

第2講 既存調査と先行研究の探索

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 既存調査を探す

1 既存調査を特定するのに必要な情報

- 調査主体・連絡先
- 実施期間
- 名称 (対象者向け / 研究者向け)
- 調査法
- 対象 (母集団・標本)
- 報告書・論文・Web サイトなど
- データ・アーカイブなどの登録情報

2 既存調査の探索

2.1 探す対象

- 先行研究
- 調査
- 質問文案・回答選択肢

2.2 探しかた

- 人に聞く
- 入門書・概説書・展望論文
- 芋づる式
- 白書、データブック
- 文献データベース
- 調査データベース、データ・アーカイブ
- 尺度集

いずれの場合も、情報の収集範囲と方法、収録基準を理解して利用すること。

調査に関する資料 (質問紙など) は、非売品の報告書に載せるのがふつう。論文や本を出版する段階では省略されることが多い。このため、自分の興味にあった質問文案を探すことは非常にむずかしい。

自分の研究分野については、代表的な調査をおさえておくこと。たとえば、

あたらしい言語表現の使用実態: 文化庁「国語に関する世論調査」

また、一度の探索で網羅的に情報が集められるわけではないので、ふだんからアンテナを立てておくことが大切である。

2.3 先行研究 (論文・書籍) のデータベース

調査を利用した研究成果は、最終的には論文や書籍になるので、それらのデータベースから情報をたどれることが多い

- 国立国会図書館サーチ <<http://iss.ndl.go.jp>>
- CiNii Article <<http://ci.nii.ac.jp>>
- CiNii Books <<http://ci.nii.ac.jp/books/>>

報告書は図書館では書籍とおなじあつかいになっている。また、調査データを利用した論文には、調査の概要の説明があるのがふつう。

「報告書」「調査報告」などをキーワードにふくめて探すとよい。

最近では各出版社の電子ジャーナルや大学などの「機関レポジトリ」(repository) の整備が急速に進み、全文をオンラインで読んだり検索したりできる文献が増えてきている。

2.4 質問文・尺度のコレクション

特定のテーマで既存の質問文をリストした本やデータベースもある。

- 『社会調査ハンドブック』(安田・原, 1982) など
- 『心理測定尺度集』(吉田編, 2001) など
- PSDB_Mie: 三重大学 心理尺度(質問項目)データベース <http://www.minamis.net/scale_search/mpsbmain.html>

2.5 調査のデータベース

調査そのものについてのデータベースはほとんど整備されていない。ただ、公開されている調査データを集めて2次利用のための便宜をはかる「データ・アーカイブ」(data archive) が最近発達しており、事実上、調査データベースとしてつかえる。

- SSJ データアーカイブ (東京大学) <<http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp>>
- 質問紙法に基づく社会調査データベース (大阪大学) <<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp>> (つながらなくなっている?)

2.6 研究課題・研究者データベース

多くの調査研究は科学研究費補助金（文部科学省または日本学術振興会）の助成を受けておこなわれているので、その研究課題のデータベース中に調査の情報がかかりある。

- 科学研究費補助金データベース（国立情報学研究所）<<http://kaken.nii.ac.jp>>

また、大学などでは所属する研究者（教員・研究員・博士課程学生などをふくむ）の研究成果の情報を収集している。これを集積したデータベースが公開されており、そこから各研究者がおこなった調査の情報を得ることができる。

- 科学技術総合リンクセンター J-Global（科学技術振興機構）<<http://jglobal.jst.go.jp>>
- Researchmap（国立情報学研究所）<<http://researchmap.jp>>

2.7 分野別研究資源情報

- 国内言語学関連研究機関 WWW ページリスト（言語学研究室・後藤斉教授）<<http://www2.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/kanren.html>>
- 国立国語研究所 データベース・リスト <<http://www.ninjal.ac.jp/database/>>

2.8 インターネット検索エンジン

インターネットで公開されている情報は、サーチ・エンジンでヒットするはずである。「報告書」「調査報告」「調査票」「質問紙」などをキーワードにふくめて探すとよい。ノイズが非常に多いので必要な情報をふるいわけにはかなりの熟練を要する。

Google Scholar <<http://scholar.google.co.jp>> は学術情報に特化した検索サービスである。非学術的な情報がカットされているのでその分ノイズがすくない。

3 本人への問い合わせ

調査主体はわかったが詳細な情報が公開されていない場合は、本人に問い合わせるとよい。調査報告書などには連絡先が通常書いてあるし、雑誌論文にも著者所属やメールアドレスなどが書いてあることが多い。また上記の J-Global などでも連絡先を調べることができる。ただし、問い合わせの前に、公開されている情報をできる限り集めてから。

4 宿題

各自の関心にしたがって先行研究あるいは調査を探す。なるべく報告書や調査票など、その調査自体の内容について詳しいことがわかる資料を探すこと。

集めた情報のうち少なくともひとつについて、つぎのことをまとめて提出

- 調査を特定するための情報
- その情報源についての書誌情報
- どういう点が自分の研究に役立ちそうか
- 調べたプロセスと、苦労した点

また、次回の授業で各自の調査企画について考えるので、どのような調査をしたいか考えておくこと。

文献

川端亮 (編)(2010) 『データアーカイブSRDQで学ぶ社会調査の計量分析』 ミネルヴァ書房 .

佐藤博樹・石田浩・池田謙一 (編)(2000) 『社会調査の公開データ: 2次分析への招待』 東京大学出版会 .

安田三郎・原純輔 (1982) 『社会調査ハンドブック〔第3版〕』 有斐閣 .

吉田富二雄 (編)(2001) 『心理測定尺度集II』 サイエンス社 .